

書評

「ケミカル・ルネサンス」 吉田 邦夫 編著 (ISBN4 - 621-05272 - 1、238 頁、丸善ライブラリー)

1998 年に東京大学を定年退官された吉田名誉教授は、熱化学法による水からの水素製造に就いての世界トップレベルの仕事を通じて、水素エネルギー分野で指導的な地位を得られた方である。本書は吉田氏を中心に 5 名の分野の異なる化学工業関連の専門家によって分担執筆されたもので、最近の化学産業全般の趨勢と近未来について多角的に纏め、かつ化学研究の在り方についても触れられており、著者達の化学産業への愛情が感じられる。また、ポリウムの割にはデータも豊富であり、全般の趨勢を把握できて、役に立つ本と言えよう。とりわけ化学分野以外の産業人や学者には一見をお勧めしたい。構成と要約を以下にまとめた。

I 部「日本の化学産業の現状と課題」:化学産業の現代的課題と経営問題、とりわけ国際競争に打ち勝つ厳しい経営戦略が、III,IV,VIの各部を通じて強調されている。本書が出たあとでも、例えば三菱化学が 2001 年まで 2000 人減の 9000 人体制にスリム化を計る計画を発表するなど不況克服の戦略が進んでいて、著者の所論が裏打ちされている。

II 部「成長産業を支える化学」:華やかな自動車、電子、パソコンなどの、所謂ハイテク産業の基礎を支える「縁の下の力持ち」が化学産業であることを具体的に指摘している。

III 部「日本の化学企業の経営戦略」:収益構造、即ち付加価値と収益管理の分析を徹底して行う事が大事で、最大稼働率やスケールメリット至上主義はもはや「神話」となった。また、海外投資戦略はきわめて複雑な判断を迫られている。

IV 部「ユニークな化学会社は成功する」:世界的には目立たない日本の化学産業の中で個性的な経営によって高収益を挙げている企業 6 社を紹介している。

V 部「情報化時代の化学」:産業の情報化と教育の重要性、また研究の情報化を挙げ、経験からコンピュータ予測を踏まえた産業への途を説く。研究開発は勿論、顧客管理、情報技術自体の改革も必要である。

VI 部「化学産業の歴史と進化」:化学産業の歴史が現代の夢を与える身近かで親しみやすい「心の糧」となって欲しいという著者の意欲が伺われる歴史の要約である。

(太田時男、岐阜県立国際ネットワーク大学キャンセラー、IAHE 副会長)

